

Dynamic diagnosis に必要な脊椎脊髓の神経症候学

編集：福武敏夫，徳橋泰明，坂本博昭

松山幸弘

浜松医科大学整形外科

最近の若い脊椎脊髓外科医はと
かく画像診断を優先し，患者の症
候を軽視する傾向があるようだ。
脊柱変形の診断も同様で，単純 X
線写真の変形をみて診断し，症候
を詳しく調べていないことがある。
脊髓傷害高位診断や病態を突き
止めるうえで最も大切なのは，
患者をみて，触って，そして表情
や歩き方もみて全体像を把握する
ことである。本書『Dynamic di-
agnosis に必要な脊椎脊髓の神経
症候学』は，生きた神経症候学を
教えてくれる。Dynamic diagno-
sis という言葉について，序文に
「臨床的技術（病歴聴取と神経学
的診察）と機械的技術とをダイナ
ミックに結びつける，新時代の神
経症候学を提唱するため」と述べ
られているが，Dynamic とは活
用できる生きた診断学，症候学を
示すとも思う。

症候診断学にはそれぞれポイン
トがある。もちろん神経症候の教
科書知識は大切であるが，その
表現の仕方や描出の仕方，みるポ
イントを非常にわかりやすく解説

したのが本書である。

本書は全 6 章から構成されてお
り，第 1 章「診療のこつ」では，
整形外科・脳神経外科・神経内科
それぞれの立場から病歴聴取と診
察のポイントがまとめられている。
第 2 章「部位別の神経学」では
大後頭孔から腰仙椎部まで脊椎
高位別の神経症候の特徴が，第 3
章「脊椎脊髓病変との鑑別診断」
では脳血管障害や内臓疾患などと
脊椎脊髓疾患の鑑別診断のポイン
トがわかりやすく整理されている。
また，第 4 章「脊椎脊髓疾患
の病理学的分類からみた神経症
候」では脊椎脊髓腫瘍や腰部脊柱
管狭窄症，筋萎縮性側索硬化症な
ど疾患ごとの神経症候について，
第 5 章「脊椎脊髓疾患における注
目すべき症状」では腰痛や下垂指，
めまい，歩行障害などの症状とそ
れらをきたしうる疾患についてま
とめられている。最後に第 6 章「脊
椎脊髓疾患における神経症候と検
査所見の対応」で，神経症候を評
価するための MRI，電気生理学的
検査，髄液検査について解説され

ている。

まさに神経症候学に多くの経験
を有し豊富な知識を有する神経内
科医，脊椎脊髓外科医などによる
ポイントを押さえた各論の論述
は，なるほどと思えるような，わ
かりやすく，説得力のあるものにな
っている。

本書は，これから神経症候学を
学ぼうとする研修医，またある程
度ベテランの域に達している専門
医，どのレベルの先生でも役に立
ち，また満足感を得られるものに
仕上がっている。私にとっても，
非常に読みやすく思わず読破して
しまった。最新の知見，そして何
よりも印象に残りやすい内容で，
読んだ後も余韻が残る優れた構成
内容となっている。是非購読をお
勧めしたい書物である。

●定価（本体 8,000 円＋税）
B5 判，316 頁，三輪書店

